

「蔦重ゆかりの地」
キャラクター
つたいやん
谷中



篤屋重三郎は、寛延3年(1750)に、江戸・新吉原(現在の台東区千束)で生まれ、20代で吉原大前に書店「耕書堂」を開業しました。「吉原細見」や「黄表紙本」の発行に携わる中で、エレキテルを復元した平賀源内をはじめ、多くの文化人と交流を深めました。そして、教科書でもお馴染みの東洲斎写楽や喜多川歌麿ら、江戸文化を代表する絵師や作家たちを見出し、「江戸のメディア王」として大成功を収めました。

1750年 誕生 江戸・新吉原に生まれる
本名は丸山料理
後に吉原で茶屋「烏屋」を経営する喜多川氏の養子となる

1772年 22歳 吉原大門前に書店を開業
吉原細見の小売開始

1774年 24歳 吉原細見『細見嗚呼御江戸』を刊行
序文を平賀源内が執筆
『一目千本（花すまひ）』を刊行
版元・烏屋としての処女作
吉原細見の出版本格化

1780年 30歳 出版業を拡大
黄表紙、往来物の出版を開始
大田南畝や山東京伝らとの交流が深まる

1783年 33歳 吉原細見を独占販売
耕書堂が日本橋通油町
（現在の中央区大伝馬町）に進出

1791年 41歳 財産の一部を没収される
山東京伝の洒落本が取締対象に
喜多川歌麿の美人画を発売

1794年 44歳 東洲斎写楽の役者絵を発売
翌年にかけて約 140 作品を次々に発表

1797年 47歳 脚気により病没

[illegible]

1

山東京伝机塚の碑
(浅草寺)

浅草寺裏



山東京伝は、蔦屋重三郎のもとで『江戸生艶気樺焼』や『通言総籙』など多くの黄表紙・洒落本を創作した戯作者で、北尾政演の画号で浮世絵師としても活躍しました。碑は京伝の弟京山が亡兄を偲んで建立したもので、浅草寺本堂裏手にあります。碑の表面には京伝が生前に著した愛用の机についての小文が刻まれています。

2

山谷堀公園

浅草7-9



元は隅田川に注ぐ水路で、江戸時代には船宿で「猪牙舟(猪の牙のように舳先の尖った細長い小舟)」を雇って隅田川、山谷堀を遡上するのが、吉原へと向かう主要ルートの1つであり、舟で吉原通いをすることが陸路よりも優雅で粋と言われていました。山谷堀は昭和に埋め立てられ、公園として整備されました。

3

蔦屋重三郎の墓碑(正法寺)

東浅草1-1-15



蔦屋重三郎は寛政9年(1797)に47歳で病没し、正法寺に埋葬されました。墓は戦災等で失われましたが、菩提寺である正法寺には墓碑が建てられています。碑には蔦重の本名「喜多川柯理」が刻まれ、碑文は蔦重と親交のあった石川雅望、大田南畝によるものです。寺には江戸三大毘沙門天の一角に数えられる開運大毘沙門天もお祀りされています。

4

平賀源内の墓

橋場2-22-2



エレキテルの復元で有名な平賀源内は、発明家だけでなく、本草学者・地質学者・蘭学者・戯作者など多彩な才能をもち、蔦屋重三郎からも吉原細見「細見嗚呼御江戸」の序文執筆を依頼されました。源内は安永8年(1779)に殺傷事件を起こして獄死し、台東区橋場にあった総泉寺に葬られました。寺は後に移転し、現在は墓のみが残されています。

5

見返り柳

千束4-10-8



吉原への出入口となる日本堤には柳の木が植えられており、遊郭帰りの客が名残を惜しみつつ、この柳のあたりで振り返ったことからこの名がつけました。かつては山谷堀脇の土手にありましたが、震災や戦災等で数代にわたり植え替えられており、現在は「吉原大門」交差点付近に植えられています。

6

五十間道と耕書堂跡

千束4-11付近



見返り柳から吉原大門へと続くS字に曲がった通りが「五十間道」です。S字カーブを描いていることにより、日本堤から吉原の様子が見えないよう工夫されていました。蔦屋重三郎は20代でこの五十間道に書店「耕書堂」を開業し、その才能を開花させました。

7

吉原大門跡

千束4-15付近



吉原遊郭の唯一の出入り口であり、治安の維持と女性の出入りを厳しく監視するため、大門の先には番所が設けられていました。門は火災等により何度か建替えられましたが、関東大震災で焼失したのを最後に再建されることはなく、現在では大門の柱を模した「よし原大門」と書かれた街灯が建っています。

8

吉原神社

千束3-20-2



吉原遊郭には、吉原大門手前の「吉徳稲荷」、廓の四隅の「榎本稲荷」、「明石稲荷」、「開運稲荷」、「九郎助稲荷」という5つの稲荷社がお祀りされていました。これらの5つの稲荷社が明治14年に合祀され、創建したのが「吉原神社」です。その後、近隣の吉原弁財天も合祀され、現在では計6つの神さまが祀られています。

9

九郎助稲荷



吉原遊郭内の四隅に祀られていた稲荷社のうち、最南端にあったのが九郎助稲荷です。縁結び・五穀豊穡・諸願成就の神さまとして篤い信仰を集め、縁日である毎月午の日は特に賑わいをみせたと言われていました。現在、稲荷社のあった場所は宅地となり、吉原神社に合祀されています。

10

酒井抱一住居跡

根岸5-11付近



酒井抱一は、姫路藩主酒井家の次男でしたが文学・芸術を好み、江戸琳派を代表する絵師として『夏秋草図屏風』など多くの作品を描きました。狂歌師としての名は尻焼猿人で、蔦屋重三郎と同じ「吉原連」に属していました。抱一は文化6年(1806)から亡くなる文政9年(1826)まで、台東区根岸の雨華庵で過ごしました。

11

徳川家治・家斉霊廟(寛永寺)

上野桜木1-14付近



寛永2年(1625)、天海僧正により創建された寛永寺は、徳川将軍家の菩提寺を兼ね、江戸時代には格式と規模において国内随一の大寺院として、現在の上野公園一帯を境内地としていました。霊廟には蔦屋重三郎が生きた時代の江戸幕府将軍、徳川家治(第10代)・家斉(第11代)をはじめ、6人の将軍が眠っています(歴代将軍霊廟は非公開。また、霊園への立ち入りもご遠慮ください)。

12

蜀山人の碑(上野公園)

上野公園4



「蜀山人」は、蔦屋重三郎と交流が深く、狂歌や黄表紙、洒落本と多彩なジャンルで活躍した幕臣・大田南畝の別号です。狂歌師としての名は「四方赤良」で、江戸の三大狂歌師の1人と言われています。碑には、寛永寺の総門であった黒門と桜を詠んだ蜀山人の歌「一めんの花は暑盤の上野山 黒門前にかかるしら雲」が刻まれています。

13

佐竹藩上屋敷跡

台東3-1-1



台東区台東には秋田佐竹藩の上屋敷があり、蔦屋重三郎と親交の深い朋誠堂喜三二(本名:平沢常富)は江戸留守居役としてここを拠点に活動していました。喜三二は蔦重の元で多くの黄表紙本を刊行しましたが、『文武二道万石通』が問題視され黄表紙執筆を断念、その後は狂歌師として活動を続けました。日本で二番目に古い商店街とされる佐竹商店街は、この屋敷から名づけられました。

14

勝川春章の墓(西福寺)

蔵前4-16-16



勝川春章は、江戸時代中期に隆盛を誇った浮世絵の流派「勝川派」の祖です。門下には勝川春好、春英ら多くの弟子があり、葛飾北斎も春章に弟子入りして勝川春朗を名乗り絵師としての活動を始めました。蔦屋重三郎の版元からは北尾重政との競作による『青楼美人合姿鏡』などが刊行されています。

15

石川雅望の墓(榎寺)

蔵前3-22-9



石川雅望は江戸時代後期の狂歌師、国学者、戯作者で狂歌師としての名は「宿屋飯盛」です。天明狂歌四天王の1人に数えられ、蔦屋重三郎の元で『吾妻曲狂歌文庫』や『画本虫撰』など多くの狂歌本を刊行しました。

16

佐野政言の墓(徳本寺)

西浅草1-3-11



天明4年(1784)、佐野政言は江戸城内で、若年寄・田沼意知への刀傷事件を起こし、老中・田沼意次とともに幕府の実権を握っていた意知は傷が原因で亡くなりました。政言は幕府からの命で切腹し、徳本寺に埋葬されましたが、田沼意次・意知父子の政治に不満を募らせていた民衆からは「世直し大明神」として称えられました(非公開)。

17

葛飾北斎の墓(誓教寺)

元浅草4-6-9



世界的に知られる名作『富嶽三十六景』は、蔦屋重三郎の死後に別の版元から出版されたものですが、「勝川春朗」と名乗っていた若き日の葛飾北斎も、蔦重の元で浮世絵を刊行したうちの1人です。北斎は嘉永2年(1849)に亡くなり、誓教寺に埋葬されました。墓には北斎の雅号の1つでもある「画狂老人記」と辞世の句が刻まれています。

台東区の観光情報はコチラ!



TAITO
おでかけナビ



台東くんX



たいとう愛
Instagram

このマップを
スマホで見る

